

「幼児教育の源流」Ⅲ

—ペスタロッチ—



二 文字 理 明

教育に携わるすべての人々にとってペスタロッチ（一七四六—一八二七）の名はあまりにも有名である。しかし彼がその生涯にわたって実践し主張し確立した数多くの教育原理について再評価、再認識、批判が常に怠りなく行なわれているだろうか。ペスタロッチは不変である。変わるのは時代であり、われわれである。古典という美名のもとに偶像化し、かえって有名無実化する弊をさけるべきは、ペスタロッチにおいてもその例外ではない。

今日における一般的に流布した異常な教育過熱の中で、幼児教育も一種のブームとさえうけとれるような活況を呈している観がある。幼児学校の設置による「幼保一元化」論と、機能的分化による「幼保並存」論に見られる中央教育審議会と中央児童福祉審議会の対立⁽¹⁾、早期才能開発を堂々と唱える能力主義の

是非、三歳児、零歳児と早期化する集団保育論議等、幼児教育は大きな時事問題となっている。その解決はもはや部分的断片的考察を許さず、その教育思想にまで立ち至った、根本からの問い直しからのみ期待されているといつてよい。このような時点において、ペスタロッチの幼児教育を掘りおこしてみることが全く無意味なことでもあるまいと思われる。

「人類教育の歴史において彼を画期的な存在たらしめたもの、彼を人類の大恩人たらしめたものは、実に初等教育改革家としてのペスタロッチである」⁽²⁾長田新のこの表現に代表されるように、ペスタロッチの貢献の最大ものは初等教育の改革であったことは周知のことである。けれどもここにおいて今一步注意すべきは、彼が初等教育にとどまらず幼児教育の改善をも同様の比重をもって重視したことであろう。そのことを彼はグ

リーブスというイギリス人にあてた『幼児教育の書簡』の第一信において次のように述べている。

「われわれの改善・組織が幼児教育の段階にまで延長されない限り、われわれの仕事は半ば成就したものとみなされるべきではなく、また人類の福祉に対するその結果にも半ばの期待もなされるべきではないことは確かである」⁽³⁾

ペスタロッチは人間の一連の自然発達の最初の過程として幼児期をとらえ、豊かな無限の発展性を蔽した可能体として幼児を描いている。十八世紀のスイスという歴史的制約下に改革を試みられた、ペスタロッチの幼児教育を、幼児の発達と訓練という側面からまとめ、更にそこに流れる教育原理を検討し、彼の幼児教育理解の一助としたい。

一、幼児の発達

ペスタロッチは何をもって「発達」とし、また何によって「発達」を促進しようとしたのであろうか。

ところでペスタロッチがその教育活動の理想とするところは、道徳を基調とした知識と技術と道徳との調和的発展である。いかえれば頭と手と心臓の発展において心臓に優位を認め、それをめぐっての調和的発展を意図していたのである。⁽⁴⁾子どもの中には既に「少なくとも発達の可能性を包含した能力」⁽⁵⁾として

の人間諸力が備わっているのであり、調和的発展の基礎は与えられているのである。

幼児の発達の過程において、身体的独立、知的独立、道徳的独立がそれぞれ、幼児のより高次な発達を成しとげていくための基本的道標となっている。

1 身体的独立

身体的な独立は生誕後幼児が手を動かし、手によって事物を認識しようとする「手の努力」⁽⁶⁾によって始まる。「手の努力」は身体的独立の第一歩である。やがて幼児は自分の意志でからだを動かせるようになる。これをペスタロッチは「歩行の開始」として大きな意味を与えている。自分で動けるようになった幼児は、それまでの身体の自由がきかないことによる母との関係を脱し、「自由な自発的な努力」⁽⁷⁾に基づく母子関係をつくりあげることになる。歩行はまた「身体に關するあらゆる能力の十分な使用法を獲得する」⁽⁸⁾という発達段階に至るためにも大きな意味をもっているのである。

2 知的独立

身体的な独立につづいて知的、道徳的独立が感じられ始める。知的独立は「思考の習慣」⁽⁹⁾の形成を意味する。きわめて不完全な形ではあるが幼児の精神のうちに「観察と記憶とから内省への一歩が踏みだされる」⁽¹⁰⁾この場合その刺激となるのは「詮索好

き」であり、子どもの好奇心から発する発問に対し賢明な答を対応させて、思考の形成をそこなわないように、注意すべきである。「思考力は幼児の心の中に芽ばえ、(中略)やがて多くの点において他人から子どもを知的に独立させる」⁽¹¹⁾のである。数、形、語というペスタロッチが要素に還元したところのものは、「思惟を呼びさまし知性を形成することによって、悟性を有効に働かせ、かつさらに将来の研究のためにこれに準備を与えるにふさわしいものとして」⁽¹²⁾知的発達⁽¹³⁾の素材となるのである。語についていえば、たとえば母国語に精通することなくして悟性は道具をもつことがないからである。

3 道徳的独立

「最も重大な歩みは心臓の愛情に対するところのものである」⁽¹⁴⁾道徳の高貴化は常に教育の第一の課題であった。だからペスタロッチは『ゲルトルートはいかにしてその子を教えるか』の中で「子どもの最初の教授は決して頭脳の仕事ではなく、決して理性の仕事ではなく、それは常に感覚の仕事であり、それは常に心情 (Herzen) の仕事であり、常に母の仕事である」⁽¹⁵⁾と述べている。心臓の愛情を指導し醇化し向上させることは、「いくら早い時期から始めても早過ぎるということはない」⁽¹⁶⁾むしろ「児童の教授の最初の時間は児童の誕生の時期である」⁽¹⁷⁾とさえいつている。

幼児の精神のうちに信仰と愛との積極的な力の存在することを、動物的本能的本性を克服し真に人間へと成長するための道徳的本性の成長の萌芽としてとらえるのである。「子どもは最も崇高的な諸徳の予感をもっている」⁽¹⁸⁾道徳的独立とは、神を認識し、神との関係の中に見いだすことであり、人間に関して自分で判断し、「人格に関する観念を得ていよいよ道徳的に独立する」⁽¹⁹⁾ことになるのである。

二 幼児の訓練

1 体操

ペスタロッチにおいて体操は「人間のいっさいの能力は進展されるべきであり、また人間のいっさいの眠れる精力は呼び起こされるべきである」⁽²⁰⁾とする、いわゆる全面発達論を根拠としている。練習は容易なものから複雑で面倒なものへと配列されるべきであり、かつそのことが最も明白に証明できる領域である。だから「欠けているようにみえる精神力は、もっぱら実行すること以外の手段によっては決して産み出されるはずがなく、いわば、あるいは少なくとも、決して発展させられるはずがない」ということを、このように明瞭に示すことのできる技術はおそらくはないであろう」とペスタロッチが言う時、体操のもつ「全面発達」「易から難へ」といった「合自然」の原理は他の教

科の教授方法にも示唆を与えうることを示している。

体操は年齢および体力の強度に応じて工夫させられればあらゆる子どもにふさわしいものであり、病人にも効用をもたらさうものとなるのである。どのような練習を子どもに課するかは母親にゆだねられており、母親は「児童体操の取扱いについての経験家に相談しよう」⁽²²⁾とすめられている。体操のよく指導された場合の具体的成果として彼は次のものをあげている。

(一)、身体の強さと器用さ。(二)、道徳教育の二大要素ともいべき快活と健康。(三)、協同精神と同胞感情。(四)、勤勉の習慣。(五)、公明で率直な性格。(六)、危険をものともせぬ勇氣。(七)、苦痛の際における男性的行為。⁽²³⁾

ペスタロッチの身教的教育に関して注目すべき点は、彼が体操だけに限定せずそこに遊戯 (Spiel) をも含めたことである。この点について彼は、

「体操によつて一般に四肢を使用しているうちに強さと器用さが習得されるであろう。しかしいっさいの感覚を働かすためには特殊な練習が工夫されるべきである」⁽²⁴⁾といっている。

「特殊な練習」とは、事物の距離や大きさの割合、色彩の濃淡、音響に対する鋭敏な耳など主として目と耳の発達を目的とする練習のことである。これをペスタロッチは遊戯の中に入れることが望ましいとするのである。「そこでは最大の自由が支

配せねばならないし、何事も愉快に行なわれねばならない」⁽²⁵⁾このような練習はペスタロッチが「趣味」 (Geschmack) と呼ぶ一種の好尚の感覚の養成へと向かう練習と結合されるべきだとしてゐる。それは「よい趣味とよい感情とは相互に密接に関連したものであり、かつそれぞれ互いに強め合うものである」⁽²⁶⁾からだ。

2 音楽

音楽の成果としてペスタロッチが期待するのは演奏の技能の熟練ではない。

「精神を最もよい印象に対して準備し、または調節するような点において、わたしがつねに最も有効であると観察してきたのは、感情に及ぼす音楽の顕著で最も有効な影響である」⁽²⁷⁾

ここにおいて音楽は、道徳教育にむしろ役立つ教科として重視される。

「音楽の教育上における効果は単に国民的感情を生動させるということだけにとどまるものではない。(中略) あらゆる悪い、あるいは狭い感情と、あらゆる偏狭な、あるいは低級な嗜好と、人道にふさわしくない、あらゆる情緒とを根絶させるものである」⁽²⁸⁾

「調和や技巧に富んだ演奏の優雅さ」は第一主義ではなかった。つまり、より高度な演奏技能の習得、芸術性ではなく、子

どもの活動、子どもの心臓にかかわる側面を重視したのである。「単純でたくらみのない歌曲」が最適の題材であったということもそのことと軌を一にしているといえよう。

3 絵画

彼は幼児の能力の最初の表われとして「模倣の欲求と試み」を認め、好奇心から、眼前のものを模写したり、手近な材料で何かを作りあげたりすることに注目した。第一に幼児のそのような最初の試みを容易にする「玩具を提供し」⁽³⁰⁾助けてやることを説いている。幼児がこれによって興味をさらに喚起される時、「器用さ」が促進され、「観察眼」が鋭くなるのである。

右のことが可能となることを前提とする彼は、その次の段階として、「絵画基本練習」を行なうことを提示している。それは「構成部分または要素に分析すること」によって幼児にも容易に行なわれうる。ペスタロッチは絵画の練習を、他の絵を模写する「臨画」よりもむしろ、自然そのものを対象として「自然から写生することを」⁽³¹⁾強調している。今日から見れば当然のことであるが、当時にあつては画期的な絵画教育の進歩というべきであろう。「物象そのものの与える印象は、真似られた外観よりもいっそう強い魅力をもっている」⁽³²⁾からだ。「光線と陰影」、「遠近法」といった基本的原理も絵画の表現に必要な限りにおいて説明を加え幼児の「器用さ」「忍耐」「努力」が

内発的に生ずるのを待つべきで、細部にわたり教えすぎること

を禁じている。

さらに任意の材料によって模倣をつくる練習が提示される。「少なくとも何事かをなすことのできる喜びは、多くの十分な興奮を伴うものである」⁽³³⁾として、技術の優秀さはなくともその制作プロセスにおける幼児の感性の昂揚を重んじているのである。

三 処罰

教育における処罰の是非は今日なお緊急の問題である。彼は処罰または体罰の禁止を主張し、子どもを責めるより教師の側を、さらに教授法を責めるべきことを述べている。しかしそれはあくまでも原則である。「体罰は教育上どんなことがあつても許容できない」⁽³⁴⁾とはいわない。彼が問題にするのは、「教師または組織が非難されるべき時に子どもらが処罰される原則に反対する」という一点である。

興味のなさ、教授に対する注意力の不足、教授に対する嫌悪等々について教師は子どもを責め、不幸を訴える権利はないのである。早期から、知識の獲得のためには努力の必要なことが教えられ、不可欠の悪として努力を考えてはならず、「恐怖の動機は努力に対する刺激とされるべきではない」⁽³⁵⁾努力が行なわ

れるなら、学習の興味付けは教師が、当面の場合においては母親が、努めるべきことの第一なのである。

ペスタロッチはまた『育児日記』の中でルソーの「自由」についてふれ、教育にとつては同様に「従順」も重要であると説いている。

「真理は一面的ではない、自由は善であるが、従順も同様に善である。われわれはルソーが分離したものを結合しなければならぬ」⁽³⁶⁾

「彼に自由と平和と沈着とを与えうるすべての機会を尊重せよ。事物の内的自然性の結果によって教えうるすべてのことを、決して言葉で教えてはならない。彼をして、見させ、聞かせ、発見させ、倒れさせ、起きあがらせ、失敗させよ。行動や行爲が可能な場合には言葉はいらない。彼は自分でなしうることは自分でなさなくてはならない。君は人間よりも自然が一層よく彼を教育することを発見するだろう。だが彼を従順にまで慣らす必要を君が洞察する場合には、君はあらゆる注意を払って、自由の教育においては困難なこの義務にまで彼を育てあげるよう準備しなくてはならない」⁽³⁷⁾

彼が「自由」の対極としての「従順」を提示する根拠としては、「従順」なしにはいかなる教育も不可能なこと、束縛なき自由は子どもの死をさえ招く危険のあること、社会生活に必要な

な習慣は抑制されずには養成されないこと等をあげている。「義務と従順とは不可離的に結合して歓喜にまで導かれなくてはならない。実際人間は盲目的に服従すべきではない」⁽³⁸⁾だから「従順」にまで子どもを到達させるのは、至難である。しかし、合自然的順序で遊戯や知恵の材料と、またあらゆる事情と協力させることで可能とすることもできるのである。「従順」を導くにあたって処罰を用いることは断じて許されない。

「無知を過失として罰するほど子どもをひどく立腹させるものはない。無邪気を罰するものは心の迷えるものである」⁽³⁹⁾

四 ペスタロッチの教育原理と幼児教育

ペスタロッチの幼児教育の底流にある基本原理は一体何であり、またその今日における有効性はどのくらい認められるのであろうか。

1 基本的原理

第一は、彼が幼児をいかにとらえていたかである。人間観の根本ともいふべきこの問題をペスタロッチは次のように規定している。「人間性のすべての能力を賦与されているものであるが、しかしその能力はいずれも発達しておらないので、いわばまだ開いていない芽のようなもの」⁽⁴⁰⁾である。彼は『幼児教育の書簡』の中で人間の悟性は全くの白紙であるというロックの

「白紙説」を否定し、むしろあらゆる能力がその芽の形で与えられていてとしている。ロックのいわゆる「白紙説」と全く対置的にペスタロッチの児童観を置きうるものかどうか簡単に即断できないが、人間に対する期待のかけ方においてペスタロッチの方がより楽観的であり、また幼児を未完成の「発達可能体」として認識している点において、ペスタロッチの的確な観察眼をより多くうかがうことはできよう。

次に、このような幼児の行きつくべき先として、つまり教育の目標として何を設定していたのか。

- (一) 個人を導いて神に対する関係の認識に至らせること。
- (二) 社会に対する関係において有用な一員としての資格を与えること。

(三) 個人としての幸福を与えること。

以上三つがその目標であった。第一の点は、神によって創造された被造物としての人間を、神によって植えつけられたあらゆる能力の自由にして欠けるところのない使用に適合させ、これらのあらゆる能力を人間の全存在の完成に向けるべきことを意味する。第二の点に関してペスタロッチが「真に有用であるためには真に独立自主であるべきことを必要とする」といつているのは注目に価する。⁴¹⁾ 独立自主はさらに自由の原理と密接不可分なものであり、ペスタロッチにとって根本的な問題であつ

たと思われる。自由の原理が人類を支配すべきであるとしても、人間が人間として完成をみないでは真の自由はありえない、とする次のような表現をみることができよう。

「人間が決断力を奪われている時、その精神が知識を貯えていない時、またその判断がおろそかにされている時、またなんぞく人間が道徳的な存在としてその権利と義務とについて無意識のままに放任されている時、自由について語ることは無益である」⁴²⁾

ペスタロッチがさらに「教育の究極目的は学校における学芸の完成にはなくて生活に対する適応にある」⁴³⁾という時、抽象的、観念的な注入主義教育を完全に否定し、生活近接の原理による生活教育、労作教育を意図していたのである。

教育を《子どもから》発想し、子ども自身のもつ内発的な諸能力の萌芽を教師はただ促進する役を担うにすぎないという「自己活動の原理」は近代教育のいわば核心といつてよいであろうが、ペスタロッチにおけるこの原理の展開はあらゆる著作の中に息づいている。思考の合理性に基づくことなく、厳格な体罰を課され、恐怖的な権威のもとに注人主義教育の奴隷であった当時の子どもを解放した基本原理は「自己活動の原理」である。「この世紀の博識でもって怠ぎすぎではならない」⁴⁴⁾といふことは今日の能力主義教育の徹底化早期化の傾向の中で再

考しなければならぬものである。

「子どもに対して多くを語ることはなくて、むしろ子どもとともに語りあうことである」⁽⁴⁵⁾

「移りやすい幼児の気分が冗長な説明に耳を傾けるように仕向けられるものであると期待するのは笑止である」といい、感情に左右されがちな幼児の気分には適合した方法によるべきことを、《子どもから》発想するペスタロッチが主張するのも当然である。それは言葉ではなく、事物によって行なわれるべきであり、直観が教授の基本とならなければならないという主張につながる。また、自然のもつ教育的感化力を大きく認め、あらゆる方法の合自然性を追求したことも今日一般に評価される点であろう。

幼児の感情の強烈さに配慮すべきことを説き、幼児期の最大眼目は心情の問題であることを特に主張したペスタロッチは幼児を「喜悅」によって支配すべきこと、決して権威によらないことを主張した。今日、幼児における遊びの重要性がよく指摘されるが、ペスタロッチにもその基本的精神はうかがうことができる。創造のよここび、豊かな感情、身体の強健は普遍的に幼児教育の重大目標である。このような幼児教育の目標を追求しながら、自分で判断し、自分で行動できる人間をつくること、自立的独立的精神とその能力の形成を実現することをめぐって

彼の幼児教育観は形成されていった。

彼の教育は早教育の推進であるがしかし、あくまで頭と手と心の調和であり、さらに心の優位における調和的發展である。今日みられる能力の早期開発は一面的で偏ばな人間をつくる危険な考え方として対比的に考えることができる。

2 家庭教育

その当否は別にして、ペスタロッチの教育原理は、「居間の教育学」、「親心子心」などと称されてきた。ペスタロッチはど家庭に重きをおく教育思想家もまれなのかもしれない。幼児の心意の発展を旨とし、その手段として母性愛に基づく母親の活動を主張した彼は、学校教育よりも家庭教育を理想とさえしている。『ゲルトルートはいかにその子を教えるか』において彼が「小学校の必要を漸次なくし、これを改良された家庭教育で補充すること」⁽⁴⁶⁾と述べているのもそれである。家庭を重視し、母親の教育感化力を重視し、さらに進んでは家庭を範とし、理想とする教育は、今日における親子間の意識のギャップ、核家族化による家庭の崩壊、そこにしのびこむ国家による道徳教育支配等、本来家庭で行なわれるべき道徳、心の問題がおろそかにされている実情を再考させる機縁にもなるであろう。

母子の関係をかなめとする家庭教育のパターンは、つづいて生起する幼稚園、保育園の誕生にも重大な契機となってきた

ることは歴史的に大きな意味をもつといえよう。「働く母親および貧困な家庭のため、幼児保育所設置の必要をも説いていること」⁽⁴⁷⁾はその証左といえるかもしれない。

* * *

ペスタロッチの教育思想の中に示された数多くの原理は近代教育の確立に大きな寄与を果たし、現代にまで影響を及ぼしている。十八世紀という時代的制約を考えれば、彼の教育原理が今日そのまま妥当なわけはない。幼児についての発達認識、訓練方法等に今日からみれば非科学的な点も存在するし、大体において彼の原理が、未分化、包括的であるという難点もある。それらは十九世紀から二十世紀にかけての心理学の急速な進歩によって是正されてきている。それにもかかわらずペスタロッチが今日教育史の上に巨人でありつづけるのは、人間に対する、子どもに対する、さらに幼児に対する根本的認識の正しさによるのであり、うむことなく実践されたその教育的努力の情熱と、権威に屈することなく民衆の解放に燃焼しつづいた生涯の力強さが人々を引きつけるのだと思われる。教育に未来を託し、教育によって未来をひらこうとした基本的姿勢は、ややもすれば教育万能の教育立国論へと至る傾きも持ちながらも、今日のわれわれになおも訴えるところは大きいのである。

(広島大学大学院)

〔生涯〕一七四六年、スイスのチューリッヒに生まれる。法律、農業の研究を経て教育を志す。実践と著作、失敗と再起を繰り返す。世間の無理解の中で教育の改革による民衆の解放をますます堅固に志向する。後半生においてはとくに教育方法上の改革に努力を結実させていった。一八二七年死没後も、近代教育の成立に与えた影響は測りしれない。

〔著作〕数多くの作品があり枚挙にいとまがない。特に幼児教育だけに限定すれば『育児日記』(一七七四年)、『グリーヴスにあてた幼児教育の書簡』(一八一八年)であろう。しかし幼児教育については、彼のほとんどの著作で少なくとも片鱗はうかがうことができる。教育方法については『ゲルトルトはいかにその子を教うるか』(一八〇一年)、『メトード』(一八〇〇年)など。この二著など、幼児にまでその方法の適用を考えていたと基本的にはいえる。これらの著作はみな母親への手引きという点で一致している。また教育小説『リンハルトとゲルトルト』(一七八一年―一七八七年)はペスタロッチの教育精神、方法を小説の形で民衆に与えようとした本であり、代表的作品といわれている。その他に、教育の基調を格言風に述べた『隠者の夕暮』(一七八〇年)、家庭や学校だけで解決できない問題を広く社会の体制の中で具体的に論じたものとして『スイス週報』(一七八二年)、『立法と嬰兒殺し』

(一七八〇年)、政治哲学的分析の『探究』(一七九七年)生涯の
総結算の書『白鳥の歌』(一八二五年)等がある。

注

- (1)朝日新聞(昭和四十六年十月六日)
- (2)長田新『ペスタロッツ』岩波書店八一ページ
- (3)ペスタロッツ『幼児教育の書簡』(平凡社版ペスタロッツ全集第
十三卷)一四七ページ
- (4)長田新『ペスタロッツ—教育学』岩波書店二〇四ページ
- (5)『幼児教育の書簡』二二四ページ
- (6)同、一五三 (7)同、二二七 (8)同、二一八 (9)同、二一八 (10)同、
二一八 (11)同、二一九 (12)同、二六五 (13)同、二六八 (14)同、二
一九ページ
- (15)ペスタロッツ『ゲルトルトはいかにその子を教うるか』(平凡
社出版全集第八卷)二二三ページ
- (16)『幼児教育の書簡』一九九ページ
- (17)『ゲルトルト』二九ページ
- (18)『幼児教育の書簡』一六六ページ
- (19)同、二二一 (20)同、二二六 (21)同、二二七 (22)同、二二八 (23)同、
二三一 (24)同、二三〇 (25)同、二三一 (26)同、二三一 (27)同、二
三二 (28)同、二三三 (29)同、二三五 (30)同、二三六 (31)同、二三
七 (32)同、二三七 (33)同、二三八 (34)同、二六三 (35)同、二六
- 二 (36)同、二三五ページ
- (37)『育児日記』二三五ページ
- (38)同、二三八 (39)同、二三八ページ
- (40)『幼児教育の書簡』一五二ページ
- (41)同、二七一 (42)同、二二五 (43)同、二二二ページ
- (44)『育児日記』二三七ページ
- (45)『幼児教育の書簡』二六〇ページ
- (46)『ゲルトルト』四四ページ
- (47)小川正通『幼児教育原理』八八ページ